

# IIIF 事業の展開

IIIF事業は前年度に一連の作業を軌道にのせるまで進めることができた。本年度は継続事業として以下のことを実施した。

## 1 図書館員向け IIIF 勉強会の開催

開催日時：2023年6月22日(木)13：30～14：50

講師：永崎 研宣氏

(一般財団法人人文情報学研究所主席研究員)

内容：

- ・第1部「IIIFとは何かとその成り立ち、現在の状況・活用事例などIIIF事業の大枠について」

会場：中央図書館1階会議室、Zoom 配信および講義録画の期間限定配信

- ・第2部「IIIF化作業の実務についての相談・指摘など」

会場：レクチャールーム

## 2 新たな IIIF 化プログラムの導入

IIIF勉強会後に永崎氏から、大量画像データのWindows一括高速処理化プログラムについての提案があり、後日IIIF化プログラムを提供いただいた。

## 3 文化推進部との連携

IIIF化の公開画像が増えたこと、古典籍総合データベースの当該資料画面でIIIFおよびマニフェストのリンク先を表示したことから高精細画像が提供できるようになった。しかしサーバとして使用している文化推進部の「文化資源データベース」のIIIFビューアは、画像のダウンロードボタンが非表示であったため、同ボタンの表示を提案し実装された。

またIIIFビューアは複数存在するなかで、文化資源データベース内で表示できるビューアが従来の1種類から2種類に増え、IIIF画像の表示や比較方法に応じたビューアが選べるようになった。

## 4 IIIF やデジタル人文学のシンポジウムや勉強会への参加

IIIF事業担当者が、最先端の動向や他機関の事例を知るために、国際シンポジウムやヒストリーテック勉強会などに積極的に参加した。

## 5 IIIF 化にともなう高精細画像の撮影と活用

当館のIIIF事業展開についてはSNSでもコメントが見られるようになり、2022年度の高精細画像活用事例で

紹介した「杉田玄白肖像」(請求番号：文庫8 A252)に描かれている本については、デジタル人文学の図書<sup>1)</sup>で引用されるなど注目を集めた。

本年度の文化財用高精細スキャナーでの撮影は、主に大判資料を選び8件について実施した。撮影時には館長はじめ職員が見学をした。

高精細画像の活用は、秋・春季企画展において企画・実施をした(各展示内容はp.12-13参照)。秋季展「蔵書票、蔵書印、書き込み：図書館に遺された所有の証」では、蔵書票の画像を拡大してはじめて読めた部分があることから、近代の彫りの細密さがうかがえた。春季展「住吉広行「春冬堂上放鷹之図」屏風～下絵からよみがえる、朝鮮王朝への贈りもの～」では、大判の屏風下絵に書かれた指示書きが読み取れたことから、デジタル彩色の再現を試みた。

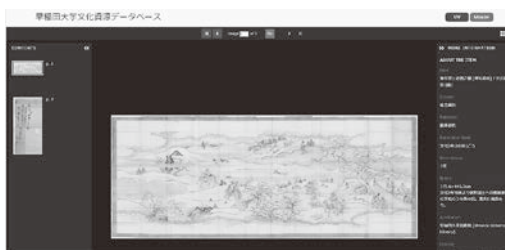


“Goethes Faust, erster und zweiter Theil / erklart von Oswald Marbach.”

(請求番号：F942 34)の蔵書票。高精細画像で拡大表示すると、書架に並ぶ背表紙の文字を確認することができる。

## 6 今後に向けて

IIIF化画像の公開を増やすとともに利便性を高めるため、古典籍総合データベースの改修を進めていく。また、画像上に直接テキストデータが表示できるようになるなど開発が進み、バージョンアップした「IIIF API 3.0」が公開されている。このアプリケーションに対応するためには、現状のIIIFサーバでの動作確認が必要であり、文化推進部とはさらに連携を深める必要がある。



IIIFビューアでの表示

1) 鈴木親彦 責任編集『共振するデジタル人文学とデジタルアーカイブ』(勉誠社、2023年、p.226)